

水きらめきLED輝く わがまち売り出し大作戦

LEDに彩られた水都・徳島

阿波おどりの本場として知られる徳島市には、吉野川をはじめとする大小138もの河川が流れている。さらに市域東部一帯は紀伊水道に面しており、まさに「水の都」である。

水の都・徳島市の象徴は徳島城址を中心に広がる近世以来の中心市街地だ。中心市街地は新町川および助任川に囲まれた周囲6kmの中州で、その形状から市民に「ひょうたん島」の愛称で親しまれている。

ひょうたん島の周囲は、親水整備が進められており、その先陣を切って整備された新町川水際公園付近には、阿波おどり会館を麓に擁する徳島市のランドマーク・眉山に向かって、3本の橋（両国橋・ふれあい橋・新町橋）が架かっている。夕刻を迎えるころになるとこの3本の橋に設置された高輝度LEDの電飾が一斉に輝き始め、明るく色鮮やかなアー

ト作品を新町川の水面のスクリーンに映し出す。これらの幻想的な光景は現在、県外観光客からも新たな夜の観光名所として注目されている。

3本の橋のLEDアートはそれぞれが有名な作家による作品だ。近年、水と緑のまちづくりを展開してきた徳島市が、地域資源のLEDを生かしたまちづくり「LEDが魅せるまち・とくしま」の一環でもある景観整備事業として、整備したものであり、平成22年4月からひょうたん島を舞台に開催されている「徳島LEDアートフェスティバル」（以降、3年に1度の開催を継続中。第2回は今年4月に開催された）のシンボリックな作品としても位置づけられている。

「徳島LEDアートフェスティバル」は、新たな魅力を持つ水都・徳島の創造を目指して、芸術文化の力を結集し、LED技術とアートが出会う芸術祭として開催されている。LEDライトを活用したイルミネーション

ティバルを開催するに至りました」
そう語るのは原秀樹・徳島市長である。高輝度青色LEDを世界で初めて製品化した日亜化学工業が立地する徳島県は、平成17年にLED関連産業の工場や研究所の集積を県内全域に図り、高度技術者の育成および先端技術の研究開発を実施する拠点の形成を目的とする「LEDバレイ構想」を発表した。

県都・徳島市は徳島県のLEDバレイ構想の主要推進役として、公共事業におけるLEDの活用や、LED関連企業の誘致などに率先して努めるとともに、前述のように、水に囲まれた中心市街地を持つ独特の地域環境を生かしたLEDの輝きが水面に映える景観整備や、さらには徳島LEDアートフェスティバルの開催などを通じて「LEDが魅せるまち・とくしま」の実現を目指している。

「とくしま」の魅力为全国に発信

この「LEDが魅せるまち・とくしま」事業は同時に、徳島市が目下、全市を挙げて推進する徳島市シティプロモーション《心おどる水都・とくしま》発信プラン（以下、発信プラン）の核の一つにも位置付けられる。

「実際の取り組みは平成23年度から開始というところで、まだ緒に就いたばかりですが、《心おどる水都・とくしま》発信プランは、故郷自慢の苦手な徳島市の人々に、まず徳島市にはこんなにも自慢できるコトやモノがあるのだということを知っていただきたい。同時にそれを全国にも発信して、ぜひとも徳島市を来訪するきっかけとしていただきたい。そのためのアピールを目的とする、徳島市の大・

売出し作戦なのです（笑）」
（原市長）

徳島市にしかないモノやコトを全国発信するべく、平成23年度から全市を挙げて推進されている発信プラン（シティプロモーション）の



毎年8月12～15日に行われる豪快華麗な本場の阿波おどり



1回目、2回目とも20万人以上の観客が詰め掛けた徳島LEDアートフェスティバル



ふれあい橋を彩るLEDアート（「虹のラクーン」たほりつこ）



はら ひでき
原 秀樹
徳島市長

ン・イベントは今や全国的に盛んだ。しかし「徳島LEDアートフェスティバル」のような、アートを前面に打ち出したイベントは非常にまれである。

「LEDを使ってこんなことまでできるという可能性をアート作品で示すとともに、徳島LEDのまちであるというイメージを全国に発信したいということから、全国でも初の試みとして、LEDアートによるフェス



通年実施の阿波おどり体験(阿波おどり会館)にはリピーターも多い

そのほか、展開目標(主要プロジェクト)別に、現在実施中の注目事業を挙げてみたい。
◆水都とくしま創造プロジェクト(民間による水辺空間におけるとくしまマルシェの開催、わくわく日曜市の開催、ひょうたん島周遊船の運行他)◆まちの歴史体験交流プロジェクト(観光ボランティア養成、市民公募)とくしま市民遺産の活用、電動アシスト自転車導入他)◆阿波おどり全国展開プロジェクト(公

質実備えた徳島のモノとコト

の導入(地域振興・観光振興のため原動機付き自転車にご当地ナンバープレート導入)

準備は平成22年度から始まった。「シティプロモーションは全市を挙げて取り組む必要がある」(原市長)ことから、行政と民間事業者、まちづくりNPOなどが忌憚なくディスカッションし、アイデアを出し合いながら解決すべき課題や、進むべき方向性を探り、それらを共通認識とするための準備会として発信プラン研究会を平成22年7月に発足。同プランは研究会で1年間掛けて練り上げられ、平成23年3月に正式に策定されるに至った。
発信プランのコンセプトは「ここにしかないモノとまちの物語」。徳島市にしかない物語性ある都市イメージとモノの開発を行い、その魅力を全国に発信していくことにある。そのための事業の展開目標を「①とくしまブランドの確立」「②全国的なイメージアップ」「③市民の愛着心や誇りの向上」に置く。目標を実現するための戦略的プロジェクトは「水



水都ならではの景観を楽しむことができるひょうたん島周遊船

都とくしま創造プロジェクト(キーワードⅡ水都)、「まちの歴史体験交流プロジェクト」(キーワードⅡ歴史)、「阿波おどり全国展開プロジェクト」(キーワードⅡ阿波おどり)、「ええもんパワーアッププロジェクト」(キーワードⅡ特産品)の4つだ。

発信プランは平成23

28年度まで実施予定(平成25年度までは前期アクションプラン実施)だが、これは「心おどる水都」を将来都市像に据えて平成19〜28年度まで実施中の「徳島市総合計画」のタームと途中から一致している。つまり「発信プラン」は「総合計画」の将来都市像実現に向けた補完的、かつ発展的な行動戦略の役割をも果たすものといえるだろう。さまざまな事業がリンクし、補い合い、高め合いながら、徳島市のブランドイメージの構築と全国発信にそのターゲットを定めているのだ。

「平成25年度までの前期アクションプランは、とくしまブランドはどうあるべきかというコンセプトの整理、全市を挙げて取り組む『オールとくしま体制』の構築、情報発信体制の整備などを行い、26年度からの後期アクションプランにおいて、マスメディアへの働き掛けや広告・宣伝企画の展開、特産品マ

募制による「心おどる水都・とくしま連」の結成、学校行事での阿波おどり講座の実施、阿波おどり会館での年間を通じた公演、観客が飛び入り参加できる「にわか連」の充実化他)◆ええもんパワーアッププロジェクト(地場産品新展開の支援、観光物産案内拠点の設置、とくしまバーガーの普及促進、とくしまIPPIN店の展開他)

これらの事業のうち、取材の際に実際に体験できたのが、ひょうたん島周遊船によるクルーズ体験だ。ひょうたん島の周囲6kmを流れる新町川、助任川から見上げる中心市街地の景観は、地上のそれとは別角度からの視点で見ることができ、とても新鮮だった。また川風の気持ちよさは言うまでもないが、それは「市民グループ有志が20年以上も前から清掃・整備し続けてくださった大変な努力の賜



400年以上の歴史を誇る「滝の焼き餅」(とくしま市民遺産)



眉山の麓に湧く名水「錦電水」(とくしま市民遺産)

物」(原市長)なのだ。当時は橋を渡るにも鼻をつまむほどの悪臭が漂っていたという。現在の「水都ぶり」からは信じられない。
また「ええもんパワーアッププロジェクト」にある観光物産拠点の一つとして開設された、駅前の「徳島市観光ステーション」(さとう百貨店地下)で貸し出している電動アシストサイクルは、取材の際も中心市街地とその周辺の地区を回るのに絶好の足となった。「徳島市観光ステーション」を運営するのは徳島東部12市町村の観光担当課が共同で結成した「とくしま旅づくりネット」(徳島東部地域体験観光市町村連絡協議会)で、同ネットは今後、徳島市および周辺市町村の広域観光に積極的な取り組みをしていくことが決まっている。
発信プランのコンセプトである「ここにしかないモノとまちの物語」を追いながらまちを回るのが恰好の案内役を果たしてくれたのが、「まちの歴史体験交流プロジェクト」にある「市



徳島市イメージアップキャラクター「トクシィ」

業の実施を行う予定です(原市長)
それでも既に前期アクションプランにおいて、例えば平成23年度中には次のような事業が主に実施されている。

◆とくしまブランドロゴマークの作成／◆イメージアップキャラクター「トクシィ」の作成と活用／◆シティプロモーションWEBサイトの開設／◆徳島ふるさと市民クラブの創設(市民登録者独自の方法による魅力づくり活動および情報発信の場)／◆「とくしまの自慢本あわいろ」の作成(市内外の人々に向けた徳島市の魅力紹介のための手作り本)／◆ご当地ナンバープレート



市内には四国八十八箇所霊場のうち五つの札所がある(13番札所・大日寺)

大地震対策検討ワーキンググループ」の最終報告では、巨大地震の予知は困難というものだった。防災というより、減災の観点からいかに事前防災に取り組みか、被害を少なくする努力をするかが重要だという結論が出された。南海トラフ巨大地震の想定範囲に位置する自治体の多くは今、防災に関して何をどうしたらいいか迷っているというのが現状ではないだろうか。そんな中、徳島市では「徳島大学と連携し、地域住民の皆さんが自ら考える独自の防災マップ作りを支援している最中」(原市長)だという。

併せて、東日本大震災以前に取り組んでい



新町川沿いの「とくしまマルシェ」

た公共施設の耐震化、津波避難ビルの指定、市民参加型の防災訓練の実施などの蓄積に加え、東日本大震災以降の視点による対策への取り組みが実施されている。例えば、食糧・飲料水等の備蓄物資の拡充、高速道路の盛り土のり面を利用した津波避難施設や高台への避難路の整備、民間の工場や倉庫において屋上への外付け階段等を整備し、地域住民も津波避難ビルとして活用できる場合に、施設整備費の一部を補助する制度の創設など、東日本大震災での教訓を生かした念入りな事業が目立つ。6月には、今後重点的に実施する防災・減災対策を取りまとめた「徳島市地震・



吉野川河口で2月に行われる幻想的なシラスウナギ漁

津波対策行動計画」を公表した。発信プランとはまったく視点が違うが、全市を挙げて取り組まねば効果が得られないという点は防災・減災対策も同様だ。キーポイントとなるのはどちらも人。「まちの振興も防災も市民との連携、地域のネットワークづくりが最重要」(原市長)なことは言うまでもない。心おどる水都を構成する大小138の河川が諸刃の剣にならないよう、徳島市では今、慎重に現状を精査し、市民との対話・連携を通じて、対策を着実に積み重ねようとしている。

(取材・文 遠藤 隆)

民遺産」ガイド、さらには「ええもんパワーアッププロジェクト」の「とくしまIPPIN店」ガイドだった。「市民遺産は市民自身に、まちの宝を探していただき、未来に残したい景観や歴史的遺構をリストアップしたもの」(原市長)で、従来の観光ガイドには載っていないディープな徳島情報が集められている。「とくしまIPPIN店」ガイドには地産ブランド食材で市民に人気の飲食店や、土産物などをリストアップ。従前のガイドブックとは一線を画した目と耳と足で取材した本物の情報が満載で好感が持てる。



徳島東部12市町村の広域圏で運営する「徳島市観光ステーション」

発信プランは徳島市の魅力をあらゆる角度から掘り起こし、磨き上げ、新たにつくり上げ、全国に発信しようとするもので、その取り組みは非常に多岐に渡る。従ってそのすべてを紹介することはとうとういできないが、徳島市の発信で絶対にはずせないのは、やはり阿波おどりの「全国展開プロジェクト」である。阿波おどりは全国各地で行われているが、注目されるのが「心おどる水都・とくしま連の結成」。8月に開催される阿波おどりの事前全国公募し、抽選で選ばれた人々たちによる「連」を結成しようという企画だ。男踊り40人、女踊り40人、子ども踊り40人の120人を1つの連として2連を結成(2日間で総計240人)、4日間開催(毎年8月12~15日)される阿波おどり期間中の後半2日間に1連ずつが、正式な連として出演できる。その際には事前に阿波おどりの講習を行い、その際の浴衣や小道具も用意される。今年で3年目を迎えるが、早くも人気沸騰しているという。もう1つプロジェクトにあった「にわか連の充実化」は、観客が服のまま飛び入り参加する名物「にわか連」をさらに拡大する企画だ。

阿波おどりの全国展開、そして防災

阿波おどりの期間中には、人口約26万人の徳島市に130万人以上が訪れる。昔も今も阿波おどりが徳島市を発信する最強のコンテンツであることには変わりない。「阿波おどり

以上、徳島市が全市を挙げてポジティブに取り組んでいる「発信プラン」(徳島市シティプロモーション)の概要を駆け足でご紹介してきたが、徳島市が全市を挙げて取り組もうとしているもう一つの事業に、南海トラフ巨大地震を想定した防災・減災対策がある。矢継ぎ早に打ち出される南海トラフ巨大地震に関する被害想定は悪化をたどり、今年5月末にリリースされた内閣府「南海トラフ巨



徳島を代表する伝統芸能「人形浄瑠璃」